

「トライアスロン大国ニッポン」の 実現をめざして

自身も熱烈なトライアスロン愛好家として知られる岩城光英JTU会長。参議院議員という多忙な身でありながら、日本のトライアスロン界の発展に並々ならぬ意欲を燃やす。すべては、来る2020年東京オリンピック・パラリンピックでのメダル獲得と永続的な競技普及のためだ。

聞き手：文／高樹ミナ(スポーツライター)

選手と組織の強化が命題

——2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた、日本トライアスロン連合の取り組みを聞かせてください。

大きな柱はエリート選手の強化と組織の強化です。エリート選手の強化には、過去にオリンピックでナショナルチームのヘッドコーチを務めた飯島健二郎監督と山根英紀監督がそれぞれ男子と女子を、23歳以下が対象のU・23では、2000年シドニー・オリンピック出場の福井英郎監督が男子を、女子を内山勇監督が指導しています。私たちはこの4つのチームを選手強化の「4つのエンジン」と呼び、2020年東京オリンピック・パラリンピックでのメダル獲得を目指して、強化プログラムに取り組んでいます。それと並行して、19歳以下のU・19、15歳以下のU・15といった次世代も中山俊行リーダーが指導に当たり、2024年をも見据えた布陣を敷いています。

——トレーニング環境の整備も進んでいるようですね。

強化合宿や大会開催地でもあるリゾート

は日本一の面積を誇っていて、海があり、常磐ハワイアンセンター(現スパリゾートハワイアンズ)のような施設を有し、これは大会開催にもつていいじゃないかと。それにはまず自分がトライアスロンに挑戦してみようと、早速バイクを買って自己流で練習を始めました。初めのうちはビンディングシューズがうまく脱げず転倒したり、25mしか泳げないクロールの距離をちよつとずつ延ばしていったりと悪戦苦闘しましたが、46歳のとき初めて大会に出て完走することができました。そのときの感動といたら、ありませんでした。翌日の新聞に「鉄人市長」という見出しで記事が載ったこともあって、やめられなくなりました(笑)。

——トライアスロンの魅力とは？

自然と触れ合う爽快感、レースを完走したときの達成感、人から応援される喜びなど、挙げればキリがありません。またスイム、バイク、ランと3種目あるので、日頃のトレーニングの時間配分やレ

ト施設の宮崎シーガイア(宮崎県宮崎市)が、間もなくトライアスロンのナショナルトレーニングセンター(NTC)になる予定です。目の前には海が広がり、周辺も自然に恵まれ、さらに交通の便や宿泊施設も整っている素晴らしい立地環境です。気候の面から見ても年間を通じてトレーニングを行える、選手強化の拠点としてはこれ以上ない環境といえるでしょう。今後は、アジア各国の合宿も受け入れる予定です。

——組織の強化はいかがでしょう？

私たちはJTU独自のマーケティングシステムを展開しています。加えて、ガバナンスの強化、コンプライアンスの維持、危機管理、倫理保持態勢、そして緊急通報窓口の設置などにも努めています。また、2014年度は私どもの事務局員2名を国際トライアスロン連合(ITU)事務局へ派遣し、グローバルな視点に立った東京オリンピック・パラリンピックの準備を進めています。

「岩城ミッション」の実現

——競技人口増加の動きも活発です。

1人当りの準備などにも工夫が必要。おのずと自己管理能力が養われて、体調管理にも意識が向きます。トレーニングもコンディションに応じて、例えば膝が痛ければランをやめて、バイクやスイムで膝に負担の小さい練習をするなどバリエーションが豊富なので、マイペースで続けられる、実は年配者にも優しいスポーツだと思っですね。実際、エイジグループでは60代や70代のカテゴリーが白熱しています。選手同士、ライバル心を燃やして切磋琢磨しています。私自身65歳ですけれども、2020年東京オリンピック・パラリンピックを楽しみに、70歳まで続けるつもりでいます。

日本をトライアスロン大国に

——機運の盛り上げには何が必要だとお考えですか？

全国各地で行われる大会を、地域の活性化にしっかりとつなげていくことでしよう。それにはやはり、競技者の裾野を

「岩城ミッション」と銘打ったプロジェクトの下、2020年までにJTU登録会員数を現在の約3万人から5万人へ、大会数約290大会を500大会へ、愛好者約37万5000人を50万人へ増やす努力を続けています。そうしたなかで、エイジグループと呼ばれる一般選手の数は増加の一途をたどり、大会によってはたちまちエントリーが定員に達してしまうような状況ですから、大会数を大幅に増やし、大会の内容も充実させて、エイジグループの皆さんの満足度を高めていかななくてはなりません。また、2016年から正式競技になる国民体育大会(国体)に続き、全国高等学校総合体育大会(インターハイ)での競技採用も目指して、全国の高校にトライアスロン部の創設を働きかけているところでもあります。

——加盟団体の協力や自治体の反応は？

全国47都道府県の加盟団体と強固な信頼関係を築き、大会の開催に関心を寄せ、サポートする自治体も増えています。トライアスロンはコースが広域に及びますし、ボランティアなどのスタッフも相当数必要なので、地域のバックアップなくして

広げ、特に子供たちにトライアスロンに親しんでもらうことだと思います。従来は陸上競技や水泳競技からの転向組が中心だったトライアスロンも、今や子供のうちからトライアスロン一本という選手が増え、2020年東京オリンピック・パラリンピックでは、そういう世代からも世界のひのき舞台に立ってほしいと願っています。彼らは皆、地域でトレーニングを積んで育っていますから、地域を挙げて選手を応援する新たな流れが生まれるはずですよ。そのためにも、JTUでは今後も、キッズの大会をより増やしていく計画です。

——2015年度は新たなテーマも設けましたね。

「The home of triathlon」です。トライアスロン界には以前から「Triathlon Family」というフレーズが根づいており、トライアスロンに関わる人々は皆、家族なのだという考え方があります。大会では多くのボランティアに支えられてレ

大会運営は成り立ちません。そこでJTUとしても、各地で開かれる大会や都道府県ならびに各ブロックの総会、連絡会、記念式典などにできるだけ足を運び、直接皆さんと意見交換をしながら、現場の声を吸い上げる努力をしています。また、トライアスロンの普及発展には国の支援も不可欠で、2006年に結成した超党派のトライアスロン議員連盟では、スポーツ行政に精通した橋本聖子参議院議員が2009年に会長となり、現在約60人の議員がトライアスロンを応援してくれています。今後も選手や愛好者の皆さんが、よりよい環境で競技に励めるよう、各方面に支援を募っていく考えです。

競技の魅力にとりつかれて

——ご自身がトライアスロンを始めたきっかけをお聞かせください。

40歳でいわき市長に就任しましたが、あるときテレビのドキュメンタリー番組を見たのがきっかけです。トライアスロンのコースは複数の市町村にまたがり、行政間の調整に苦労していることも知って、思い立ったのです。当時のいわき市

スができますし、普段は共に励まし合い切磋琢磨する仲間がいて、家族やコーチにも支えられています。トライアスロンは個人競技ではありませんが、決して一人ではできません。そうした特性もあり、人に感謝する気持ちや仲間意識が芽生えやすい。子供たちにトライアスロンに親しんでほしいというのも、その点が大きな理由の一つです。

——2020年とその先の未来に向けて、抱負をお聞かせください。

東京オリンピック・パラリンピックでは多くの国民の皆さんにトライアスロンという競技の魅力を知っていただき、理解を深めていただきたい。そして2023年にはインターハイに参入を目指す——これが私どもの大きな目標です。次世代の選手強化はもちろん、その下の世代に裾野を広げ、世界でも指折りのトライアスロン大国という位置づけを目指していきたいと思っています。夢は「トライアスロン大国ニッポン」です。

